



K140.72

2.21

2上a



高等小學書方手本

女子用第二學年上甲種

文部省

しろたへの衣の塵は掃へども  
憂まは心の曇りなりけり  
とりぐにつくるがざしの花もあれど  
にほふ心のうるはしきかたな

高甲上

奥深き道も極めん物事の  
本来をだにたがへざりせば  
國民をすくはん道も近きより  
かし及さん遠きさかひに

高甲上

寒地から熱地へ熱地から寒地へわたる  
禽鳥で我が帝國の領土を過ぎて翼を  
休めるものは少くない。鶴の群は西比利亞

方面から飛んで来て朗な聲を朝鮮の  
空に響かし鷺は熱帯地方から  
飛んで来て一望十里の青田に下り立つ。

彫刻繪畫類聚參

五

高甲上

考陳列裝飾展覽

高甲上

六

近衛鷹司九條足

七

高甲上

利後田重正徳川

八

高甲上

人怒ル時ハ感情益々激スルヲ以テ言行自ラ  
常軌ヲ逸シ冷靜ノ我ニ復リテ後悔スル  
コト多シ。西諺ニモ怒ノ最後ノ瞬間ハ後悔ノ

九

高甲上

最初ノ瞬間ナリトイヘリ。怒ルトモ直チニ之ヲ  
言動ニ發スルコトナク先ヅ心ヲ冷靜ニシテ  
然ル後徐ニ之ニ對スル處置ヲ考フベキナリ。

高甲上

十

硼酸。絆。創膏。脫脂綿。

十一

高二甲上

繡帶。含嗽劑。灌腸器。

十二

高二甲上



鏡は一物をたくはへず私の  
心なくして業の影を照すに

是れは善悪の心あら  
はれずといふことなし。

官國幣社熱田賀茂男  
山平野稻荷廣瀨龍田

十五

尚三  
甲上

鹿島香取湊川藤島四  
條畷鹽竈金刀比羅

十六

尚三  
甲上

何才に鳴きて行くらん  
ほととぎす  
後のわたりの  
まだ夜涼きに。

高甲上

時を平安城を  
すぢかひに。  
時を鳴くや空雀と  
十字字。

高甲上

千古の雪を戴ける富士の高嶺も  
一株の白雪其の山腰を掠むる時  
益々雄大の觀あり。霞霞の奥にも

尚花あるを思はしむる時吉野  
山一目千本の光景は殊にゆかし  
きを覺ゆるにあらすや。

器。漱。鏡。細。首。菌。繁。殖。

五

商甲上

畜。毀。物。新。陳。代。謝。

二十一

商甲上

兄弟泣くく立出づるを母は  
聲を上げておれ止め給へんよ  
今こそ時致が甚當許すぞと

泣くく立出づれば兄弟も  
うれし泣きに伏轉び見る  
人をもたもとをしほる。

矯風彰善。慰撫救濟。

二十五

高甲上

去華就實。拳服膺。

二十六

高甲上

竈。爐。銅。壺。藥。罐。鐵。

二十七

瓶。飯。櫃。摺。鉢。柄。杓。

高三甲上

二十八



父上には近頃は古肩の凝りはげしく梅庵は  
私のり課の一つにて大分上手に相成り精一郎は学  
校へ来る事を何すりの樂みに致なり学業の成  
績はお変らず優等には産けぬは進々智慧

づきはるを交りにて色々おしやべり致し身に可達ら  
しく申す正作は五三のあより少しづつはひねりおも  
ちやを前に置きてははせりば氣はかりあせりて思ふ  
様にはへずしまひには泣出すのも可笑しくは産け

咸鏡平安黃海京畿

三十一

高甲上

江原忠清全羅慶尚

三十二

高甲上

損失價格契約書

責任保險契約書

佛法得道。說教感。

三十五

高三甲上

化譬喻。智慧慈悲。

三十六

高三甲上

思慮周密にして果斷に  
富み計畫一たび定まれば  
直ちに之に着手し勇往邁進  
成功を見ざれば止まず。

活動を以て無上の娛樂とし  
安逸を以て最大の苦痛とす。  
獨り自ら活動するのみならず  
又能く人を活動せしむ。

OK 14072-221  
-25a

大正元年十二月十三日翻刻印刷  
大正二年一月十日翻刻發行



著作權所有

大正元年十二月十六日  
文部省檢査濟

發賣所

東京市日本橋區新  
右衛門町十六番地

高等小學書方手本女子用第二學年上甲種

定價金參錢

著作權  
發行者

翻刻發行  
兼印刷者

印刷所

株式會社

國定教科書共同販賣所

日文部  
高部  
秩父省

大阪市南區難波書原町千八百八十八番地  
大阪書籍株式會社  
代表者 三木佐

大阪市南區難波書原町千八百八十八番地  
大阪書籍株式會社  
助社

